

22 いけばな

知る

いけばなとは

「いけばな」とは、自然の草花や樹木を素材として、それを器とともに組み立てる伝統芸術です。室町時代から江戸時代にかけて、池坊を中心到大成されました。立花(たてはな・りつか)・抛入れ花・生花・盛花などの様式があり、また花道と総称されたこともありましたが、現在では「いけばな」の呼称が一般的です。

いけばなの源流

挿した花を觀賞するということは古くから行われてきたことでした。『枕草子』(二十三段)に

勾欄のもとに、あをき瓶のおほきなるをすゑて、桜のいみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、勾欄の外まで咲きこぼれたる

と見えるように、大きな瓶に大ぶりの花を挿したものが、当時の瓶花の主流だったようです。また、平安期の花合や前裁合なども、縁からそれらを觀賞したようので、特にさまざまな草木を植え込んだ前栽は、草体のいけばなの源流のひとつと見られています。

こうした「美」の対象としての花と、神の依代として神聖視された花や仏前に供えられた花が習合して、いけばなの源

流が形作られていきました。

七夕法楽花会と池坊の登場

室町時代になると、三代將軍足利義満の頃から花の御所や北山殿で、七夕法楽として仏教的行事の中で花を立てることが、盛んに行われるようになりました。朝廷でも十五世紀のはじめに、伏見宮貞成親王の邸宅であった伏見殿で、七夕法楽花会が数多く行われていました。花鳥の絵を掛け、屏風を立て、そこに瓶に挿した花を飾り楽しみました。この花会は仏教的行事とはいえず、花を見ながら歌を詠み酒を飲むということ、かなり自由な雰囲気のものでした。花会の後に花は一般に公開したため、徐々に「見せる」ということが意識されるようになります。



「いけばな発祥の地」石標(六角堂内)。上部の石板は『池坊専応口伝』の写し。

花会において花を立てることは、その周囲の飾り付けを含めて、依頼を受けた専門の者が担当していました。將軍に仕えた同朋衆の立阿弥や能阿弥、山科家の雑掌である大沢久守、六角堂(頂法寺)の池坊専慶らがそうです。中でも池坊専慶は、寛正三(一四六二)年に京極持清に招かれ花を立て、大変評判となりました。

彼らの登場の背景には、床の



右は二代池坊専好の立花を再現したもの。(池坊頂法寺会館)

間を持つ書院造の出現にともない、その座敷飾として花を立てることの需要が高まったことがあります。その後、立花は装飾性を強めていきます。

十六世紀前半には、文阿弥(二世)と池坊専心(二世)がそれぞれ『文阿弥花伝書』『池坊専心口伝』という書を残し、立花の理論・様式の基礎を確立しました。文阿弥は青蓮院尊鎮法親王のもとで、専心も禁中や青蓮院で、たびたび花を立てています。文阿弥(二世)と池坊専心の評判は

池の坊御前の花をさすなれば

一瓶なりとこれや学ばん

すいに花たつる文阿弥当世の

人の心になふなるべし

と歌に詠まれていきます(『多胡辰敬家訓』)。

立花の大成

豪壮で華麗な安土桃山時代の建築に合わせるように、立花も大型で複雑なものへと変化していきます。初代池坊専好(一五三六〜一六二二)は文禄三(一五九四)年に前田利家邸に

において座敷飾を施し、「池坊一代の出来物」と賞賛されました。

この時の飾りは「砂の物」といって、大きな盆に砂を張りその上に花を立てたもので、平安時代の洲浜台に原型があります

それを受け、立花を大成させたのが二代池坊専好(一五七六〜一六五八)です。後の公家近衛家熙の談話筆録『槐記』には「立

花の中興は専光(好)に止りたり。専光を名人とす。」と評されています。後水尾上皇(一五九六〜一六八〇)は立花好きとして有名で、幕府との争いから逃避するかのようになり、専好を召して立花会を頻繁に開いていました。そこで専好は、上皇・公家・僧侶に対して指導的役割を果たしており、専好の作品を図化したものは、現在も多数残されています。

この頃から花といえば池坊だという考えは、人々の間に広がっていきます。専好による様式の完成以降は、立花(たてはな)は立花(りっか)と読まれるようになります。

また、花器も、それまでは他の用途に作られた器が転用されていましたが、この頃になると国内で大型の立花瓶が生産されるようになります。

茶花・抛入れ花・生花

形式が確立し大型化していった立花に対して、庶民の間では形にとらわれないシンプルな花が求められました。室町期には自由な形のいけばなは「生花」「なげいれ」と呼ばれ、これは安土桃山期に茶席を飾る茶花として千利休により確立されます。利休は「花は野にあるように」といって自然のままの簡素なスタイルを主張しました。

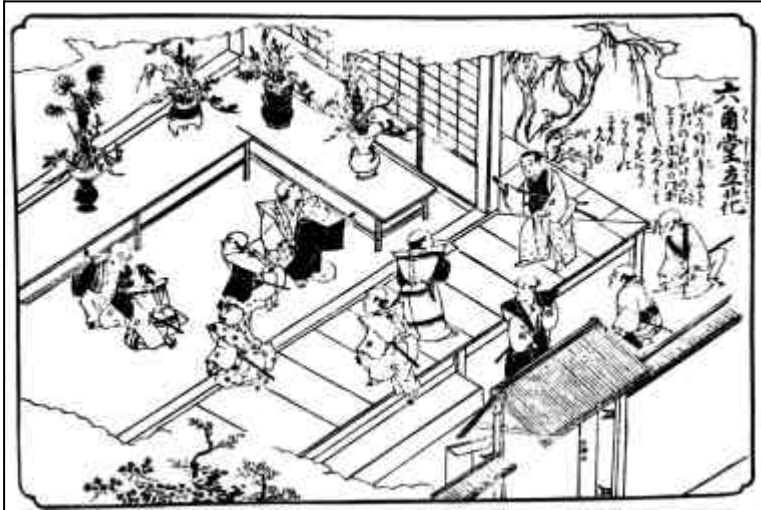
この茶湯からの流れは江戸期には抛入れ花と呼ばれ、寛永の頃(一六二四〜一六四四)から一般の大衆の間にも流行し始めます。気易く即興的にいけられることと大きな空間を必要としないことから、茶席だけでなく日常生活の中にも広がっていきました。

さらにその流れは、明和から天明の頃(一七六四〜八九)に生花という形でひとつの完成を見ます。遠州流、源氏流、少し下って未生流など次々に新しい流派が誕生し、それぞれ

の主張のもとに生花の指導を始めます。池坊側もそういった新しい流れを無視することはできず、生花として様式に取り入れていきました。

江戸時代後期には生花がおおいに流行し、またその形式も定まっています。それを嫌った文人たちは、煎茶を愛好し、中国の花書『瓶史』の影響を受けて、文人花という様式を作り出しました。

町人への立花の普及



六角堂立花会の情景。全国から門弟が集まり花を立てました。『宝永花洛細見図』巻十二

大雲院で開催した百瓶花会では、町人の参加は百人中四人でしたが、寛文十三（一六七三）年に出版された『六角堂池坊并

公家の教養であった立花は、二代池坊専好の頃から富裕な町人の間にも普及し始め、門弟にも多くの町人が含まれるようになりました。池坊の拠点が、下京の町衆の中心的存在であった六角堂に置かれていたということも普及を助けました。

慶長四（一五九九年）年に初代専好が寺町四条下るのが寺町四條下るの

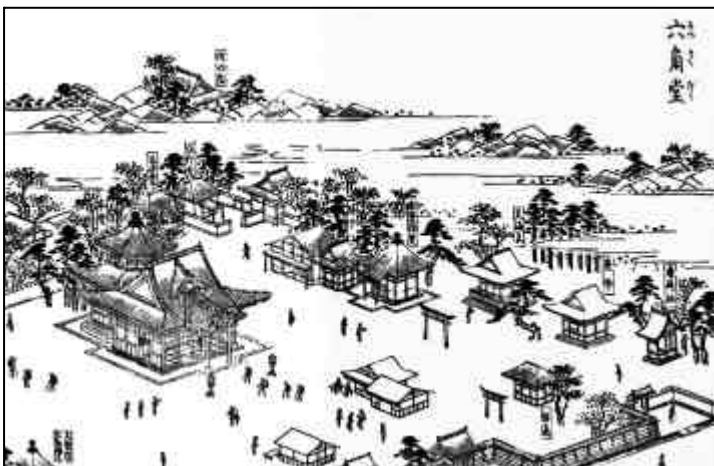
門弟立華砂之物図』では、門弟二十一人中半分以上の十二人が町人で占められています。その背後には、床・棚を備えた民家の構造上の発達や、富商が自らの財力を示す象徴的存在として立花を取り入れたということが見受けられます。その後、池坊の門流は全国に及ぶようになります。

また、花の栽培が桃山時代以降に本格化したことも、いけばなが大きく普及した理由のひとつにあげられます。椿や菊などの品種改良も盛んに行われました。

家元制度の確立

池坊では、二代専好の弟子に大住院以信や安立坊周玉、富春軒仙溪、十一屋太右衛門などの人物があらわれ、隆盛を迎えます。特に大住院以信は江戸で大名家へ出入りし、高い評価を得ました。一時は、門弟でありながら池坊と名声を二分するほどの人気でした。

しかしその結果、大住院以信は池坊側と、特に同じ門弟である安立坊周玉と対立し、最終的に池坊を離れることとなります。その中で、池坊には一門を守らなければという危機意識が生まれ、家元制



六角堂 『都名所図会』巻一(部分)

度が確立されたのです。延宝六（一六七八）年には永代門弟帳が作られ、階梯制のシステムが整備されました。このシステムは全国に広がり、爆発的に門弟が増加しました。文化年間（一八〇四～一八）には六万人の門弟を数えたといわれています。

「道」としてのいけばな

秘伝を習得しようとする求道的精神の高まりの中、「茶道」「香道」などとともに、いけばなも「道」としての性格を強めていきます。元禄元（一六八八）年刊行の『立華時勢粧』に初めて「花道」という言葉が使われています。幕府による教化政策に儒教思想が重視されるとともに、いけばなは道義的意味合いを強めていきました。そして女性の習い事として庶民に浸透していき、次第に稽古による礼儀作法の習得が目的となつていきました。

歩く／見る

六角堂(頂法寺)・いけばな資料館

中京区六角通烏丸東入

六角堂は正式名称を頂法寺という天台宗の寺院です。本堂が六角宝形造であるため六角堂の名で親しまれています。池坊はもともと六角堂のひとつの坊でした。応仁・文明の乱後、上京の革堂(行願寺)に対する下京の町組代表者の集会所として中心的役割を担いました。本堂の前に埋まる円形の石は、臍石と呼ばれ京都の中心をあらわしているといわれています。

いけばな資料館は、六角堂の境内に建つビルの三階に昭和五十一年にオープンしました。十五世紀末に成立した最古の花伝書『花王以来の花伝書』や『池坊専応口伝』など、池坊に伝わる華道資料を中心に展示してあります。見学には予約が必要です。

池坊短期大学むろまち美術館 下京区室町通四条下る
昭和二十七年に設立された池坊短期大学の学内に、平成十一年にオープンした美術館です。池坊華道の資料を中心に、日本の伝統工芸品を収集・展示しています。



六角堂(頂法寺)